



Title	「アイヌ文学」と「給与地」闘争 : 「階級的組織化」をめぐる向井豊昭・石井清治・原田了介・福澤稔(ひだかたかし)の視点から「脱殖民化」へ
Author(s)	岡和田, 晃
Citation	アイヌ・先住民研究, 5, 35-62
Issue Date	2025-03-30
DOI	https://doi.org/10.14943/Jais.5.035
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94275
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_5_p35-62.pdf



【論文】

「アイヌ文学」と「給与地」闘争 ー「階級的組織化」をめぐる向井豊昭・石井清治・原田了介・ 福澤稔（ひだかたかし）の視点から「脱殖民化」へー

岡 和 田 晃*

要 旨

本稿は「アイヌ」と和人の関係史的な視点を採用し、文学史や運動史の死角を逆照射することを目指す。その際に着目するのが、旧土人「給与地」をめぐるアイヌの闘争における連帯のあり方だ。1950年代後半からの観光ブーム期、アイヌは主体的な語りを剥奪され、運動は停滞状況にあった。貝沢正らアイヌは「被差別部落民」との共闘をはかることで突破をはかったが、架け橋となった石井清治は日本共産党員で、同志・原田了介とともに大狩部旧土人「給与地」返還闘争を戦った経験を有し、福澤稔（ひだかたかし）や向井豊昭は、その後の共産党とアイヌ、医療や教育制度をめぐる状況を、それぞれ小説化した。彼らの目指した「階級的組織化」はパターンリズムの弊害を免れるものではなかったが、それでも病院の設立やインフラの整備といった具体的な成果があったうえ、レイシャル・キャピタリズムの制度的固着を食い止める批評的な可能性を有した点が評価に値する。

キーワード：アイヌ文学、北海道文学、旧土人給与地解放闘争、勤医協・民医連運動、日本共産党

1、「アイヌ-シャモ問題」における「アイヌならざる者による現代アイヌ文学」

日本語で書かれた「アイヌ文学」を分析する枠組みのなかには、アイヌ民族の出自であることをカミングアウトした書き手による文業のみを「アイヌ文学」だとみなす視点（川村編著 2009 等）に留まらず、「アイヌならざる者による現代アイヌ文学」という枠組みをも採用するアプローチが存在する（岡和田 2014、2018）。非アイヌによる書き手をも「アイヌ文学」だとみなすことで、当事者性の枠を押し広げ、従来「アイヌ問題」とされてきたものを——アイヌのみに責任を帰す必要はないのだと——「アイヌ-和人（シャモ）問題」として関係史的に捉える観点（石川 2015）をふまえつつ、「近代アイヌ文学のテーマは（注：当事者の）アイデンティティ以外にはないんだと思われてしまう」（ウィンチェスター&ナカムラ 2023：69）隘路を迂回するひとつの試みとみなすことができる。

「アイヌならざる者による現代アイヌ文学」としてまず言及すべきは、北海道で四半世紀にわたり小学校教員として勤務した向井豊昭（1933～2008）であろう。向井は 1960 年代から 70 年代に

* 文芸評論家・東海大学文化社会学部

かけてアイヌと教育をめぐる運動のメイン・プレイヤーの一人としても知られ、アイヌと政治をめぐる複雑な「生政治」（フーコー 2008）を、ヒストリオグラフィー（文学を通じた歴史叙述）（中井 2001）として詳細に記録し、その経験を核としてきた。「アカの紐つき」とみなされていた日本民主主義文学同盟をはじめ、各種の運動にコミットしつつ、党派や教条主義とは異なる「個」の揺れ動きを書き表してきたのである（向井 2014）。アイヌの出自を公表していた近代小説の書き手としてまず名の挙がる鳩沢佐美夫¹との交流および決別、さらにはその過程をも小説化した「脱殻（カイセイエ）」（向井 1972）等、看過できない仕事をなしている（向井 2019）。

本稿では向井のみならず、北海道で勤医協・民医連運動に関わった石井清治（1928～1995）や、石井と交流があった福澤稔（筆名・ひだかたかし、1943～？）、先行世代の浦河町議会議員・原田了介（1906～1981）らの活動やテキストを分析していくことで、1950年代から70年代にかけてアイヌ民族の置かれた状況を考察する。石井や原田は熱心な日本共産党員で、民医連・勤医協運動に参画しつつ、アイヌの福祉向上に本格的に関与し、その経験を積極的に文章として遺したことが共通する。没後も、有志や遺族によって彼らの遺稿集が編まれているため、それらをひもとけば足跡を辿ることができるのだ（「石井清治さんを偲ぶつどい」実行委員会、原田シゲ・原田克 1983）。石井や原田は、アイヌ解放運動を旗印に掲げた雑誌『北方群』（1967～1983）の同人だった。石井は「アイヌ病院」と呼ばれた厚賀診療所（現：北海道勤労者医療協会厚賀診療所）に勤務していた頃の話積極的に書き残している（石井 1988a）。また原田は『日高文学』5号（1960）に長編批評「日高の森と海と馬」を寄稿していたが（原田シゲ・原田克 1983所収）、同号は鳩沢佐美夫が初めて公に発表した詩編（鳩沢 1960）への評価を含む合評が掲載された号でもある。つまり、血が規定する「人種」性や、本質主義的な同質意識ではなく、佐々木昌雄が言うところの「状況としての「アイヌ」」（佐々木 2008：201）に和人支援者の立場から関わっていた²。

石井が遺した論文（石井 1965、1970）は、しばしば「アイヌ」研究での参照先になってきたし（小川 2022：230）、福澤は石井の影響下で「アイヌ」に関心を持つようになったともいう（福澤 1990：455-456）。原田は晩年まで、えりも岬にある百人浜でアイヌが虐殺された史実を、本にまとめようと試みていた（原田了介 1975、および原田シゲ・原田克 1983）。彼らには近現代の「アイヌ」の経験を、歴史的な加害性をふまえた自らの痛みとして反省的に捉え返そうとする姿勢があり、そこが向井と共通する。

向井とは違い、石井や福澤、原田が近現代の日本文学史の類において職業的な文学者とみなされ

1 アイヌ当事者の手になる小説が単行本として単独で繰り返しまとめられているのは、鳩沢だけという現状がある（遺族によってアイヌだと明かされた小説家は他にもいるが）。実際、川村編著2009に収められた狭義の小説家は、鳩沢佐美夫のみである。

2 ただし、石井の妻は樺太アイヌであるというから（石井1988a：11）、そうした観点からはアイヌ・コミュニティの一員とみなすことも可能であろう。

たことはなく、当人たちにもそのような自認はなかったものと思われる³。けれども、後述する豊美コタンの「給与地」闘争とその余波は、きわめて特異でありながら、そこに関わった石井らにつき、踏み込んだ研究はなされておらず、当然、石井の影響下、客観的な「事実」と主観的な「真実」のあわいで書かれた福澤の小説のようなテキストを読み解くことが困難になってしまっている。

つまり本稿では、非アイヌでかつ職業的な文筆家でもない「アマチュア」（サイード 1998）が遺した仕事を参照するための文脈を整理し、個人と党派、文学と運動、民族と階級をめぐる「伏字の死角」（内藤 2015：7）を照射した福澤のテキストを読むための基礎的な文脈を提示したい。その過程で本稿は、「開拓文学」や「農民文学」としての伝統を有する旧来の「北海道文学」史はもとより、プロレタリア文学史やアイヌ史においても掘り下げられているとはいえない「アイヌ」と共産党の関わりに焦点を当てる。近現代文学研究（特に比較文学）と文芸批評の方法論に加えて近現代アイヌの思想史・運動史をも、和人との関係史の観点より参照していくアプローチは、すでに先行論文（岡和田 2023）が発表されているが、本稿はその系譜に連なるものにもなっている。向井のテキストが有する可能性を、いまだ適切な評価がなされていないもの——例えば福澤の作品——へとつなげる。本稿では、そのためのコンテキストを提示する。

2、「階級的組織化」の発火源たる、近文アイヌ「給与地」問題

石井は亡くなる2年前の1993年、『勇者たちの道：昭和期北海道アイヌ運動小史』（石井 1993）と題した小冊子を刊行している。「明治維新によって誕生した天皇制政府」（石井 1993：1）がアイヌを「旧土人」として「臣民」に取り込んだことから始まる、抵抗史観に基づく近現代のアイヌ運動史である。征服者たる和人の史観ではなく、あくまでも蹂躪されたアイヌの側に立って歴史を描きなおすこと。新谷行『アイヌ民族抵抗史』（新谷 1972）を皮切りに、当事者たるアイヌをルーツに持つ者のみならず、和人の支援者もまた、しばしばかような史観を採用してきた。

『勇者たちの道』が目指すのは、天皇を頂点とするヒエラルキー構造の内で搾取される側としての民衆と被差別部落を、「階級的組織化」の立場から並列的に捉える姿勢である。1921年、日本労働組合総同盟が、1922年には農民組合、そして全国水平社や日本共産党が結成される、という塩梅である。つまり「階級」と「民族」は対立するものではなく、本来は連帯してしかるべきだと石井は捉えていた。この流れから、砂澤市太郎らによって1926年に設立された解平社がクローズアップされる。水平社にちなんだネーミングになっていることから自明だが、部落解放運動より影響を受けた「アイヌ民族解放運動」の代表例だったからだ。石井は解平社結成と前後して、武隈徳三郎、知里幸恵、遠星北斗、バチラー（バチェラー）八重子ら、「アイヌ」としてのアイデンティ

3 事実、北海道文学館編（1985）にも石井、福澤、原田の項目はないが、とりわけ石井や福澤は、有安俊一遺稿詩集出版委員会編（1992）に参加するなど、文学を介して「社会的弱者のために怒りの涙を溢れさせてたたか」うことの重要性を強く自覚していた。

ティを文学作品として書き残した書き手を紹介していく。それと並行して石井が着目するのは、北海道旧土人保護法に代表される種々の悪法によって、アイヌの土地が奪われていったプロセスの記録である。

焦点化されるのは、近文アイヌ「給与地」問題だ。砂澤市太郎らが解平社を設立したのも、この問題を見越してのものだった。「一九〇〇年、陸軍第七師団が旭川の近文に進駐することに伴い、近文コタンのアイヌ全員を、遠く天塩川上流へ強制移住させるという問題に端を発して、旭川アイヌは政、財、軍を相手に三十数年間にわたる抗争をつづけました」（石井 1993：6）と、その「アイヌの民族的結集を呼びかけたはじめての組織」としての性格が端的にまとめられていた。近文アイヌ「給与地」闘争を経て、旭川のアイヌは自立性を尊ぶ独自の気風を生むことになるが（金倉 2006）、当時の状況を別角度からより細かく確認してみたい。

まず、アイヌに給与されるはずの予定地へ北海道国有未開地処分法を適用させ、かつ、すでに和人参作人へ「転貸」されていた土地を安く払い下げようとする請願運動が活発化していた（竹ヶ原 2010:290）。かてて加えて、旭川市の都市計画上の都合で、近文アイヌを「樺太」ないし「オサラッペ」（現・上川郡鷹栖町）へ追放せんとする目論見が遂行されていた（竹ヶ原 2010：292）。まさしく官民の共謀による軍への付度によって、なけなしの「給与地」すらもがアイヌから強奪されようとしていたわけだ。

翌 1927 年に近文アイヌは労働農民党豊栄支部を結成、これは労農党旭川支部の分会のような位置づけにあったようだが、同支部はアイヌ民族との連帯を念頭に置いた「アイヌ種族差別待遇撤廃」を政策に掲げていた（竹ヶ原 2010：301-302）。ちょうど労農党が分裂し、右派の社会民衆党が成立した後のことである。解平社の設立に対しては森竹竹市から、「アイヌ」が「至公平の社会的地位を獲得」することを期待した共感のエールがいち早く寄せられた（森竹 1926）。これを石井は、「水平社運動に強い影響を受け、旭川の解平社結成にも協力した」と総括している。

「アイヌならざる者による現代アイヌ文学」という視点ではどうなるか。本節では鶴田知也と小熊秀雄の仕事に触れてみたい。砂澤市太郎は 1930 年 12 月には「北海道旧土人保護法問題」と「アイヌ差別観念打破」を主題とする演説会を札幌で開始し、1932 年 5 月には、給与予定地の「無償下付け」実現に向け、東京で関係省庁への陳情を行った。ところが近文コタン内では足並みが揃わず、全土地獲得を目指す豊栄互助財団派（財団派）と、道庁の妥協案に同調する穏健派の内部対立が表面化していた（小正路 2010:253）。こうした状況を見据え、鶴田知也はプロレタリア文学の雑誌『レフト』第 2 巻 8 号（1933）に「ペンケル物語——キロロアンとテルキ——」を発表する。小正路淑泰の指摘によれば、「ペンケル物語」では、強権的な和人の収奪が、胆振之国の森林に住まう「悪魔のような熊」に擬えられ、その猛威に対峙すべく「七つの部落」の連帯を目指す「キロロアン」や「テルキ」といったアイヌは財団派のイメージで描かれており、テルキを「わざと熊を怒らして部落を滅ぼさうとしてゐる」と牽制する「老酋長」^{オトナ}らも穏健派の寓喩として描くことで、解平社へ

の連帯を示そうとしている（小正路 2021：255）。ただし、「ペンケル物語」の末尾では、南方より現れた「日本人^{シヤモ}」が「悪魔のような熊」とは別個に描かれ、アイヌモシリを完全に征服したと書かれて締められるわけで、読者はテルキらアイヌの奮闘に共感しながら、征服と同化を所与の現実として受け止めないわけにはいかなかった。

当時「旭川新聞」の記者をしていた小熊秀雄は、当然、近文アイヌ給与地問題の動向を承知していたろうが、後にアイヌ民族を扱った叙事詩『飛ぶ櫓』（1935）をものした際、クライマックスで登場人物であるアイヌの四辻権太郎に「——シャモ、おら社会民衆党さ入ったテ、／アイヌ、アイヌで馬鹿にするな、／アイヌも団結すれば強いテ、」（小熊 1935 = 1991：107）と言わせている。事故に巻き込まれた和人の山林官を雪崩の下から救出する場面であるが、佐藤（1968：157）が指摘するように、このとき、アイヌの仲間は死ぬか村を去り、権太郎は孤立を余儀なくされていた。社会民衆党は 1932 年に全国労農大衆党と合同して社会大衆党となり、後に翼賛体制を下支えるようになるが、当初は無産政党で、かつ「イギリスのフェビアン協会系の社会主義政党」としての性格を有し、サラリーマン層の支持を得ていたという（柄谷 2002：126）。第 1 回の普通選挙（1928 年）で菊池寛が社会民衆党から立候補したように、同党はジャーナリスティックな注目を集めていたので⁴、小熊は作劇上のダイナミズムを狙ったか、決して一枚岩ではないアイヌ間のあり方を伝えようとしたのかもしれない。

しかし、東村岳史が指摘するように（東村 2021：54-55）、1930 年の「上京」後、父権的温情主義（パターンリズム）に満ちた視点でアイヌを「滅びゆくもの」として捉え、侮蔑する小熊名義の原稿が旅行誌『旅』に掲載された（小熊 1930）。にもかかわらず、先述した『飛ぶ櫓』の四辻権太郎は、明らかに「滅亡」のフレームに留め置かれる存在ではなく、いっそうパワフルに和人を助ける。これは幸福にして無害な空想というよりも、小熊が遠星北斗やバチラー八重子らの仕事に学ぶことで、和人としての加害性を自覚するに至り、言説を転換させた証左だと言えるかもしれない（岡和田 2021b）。既存の小熊研究や応答において、小熊の父権的温情主義を批判した事例がまとまった単行本で提示されるのは、向井（2014）ほか少数に留まる（岡和田 2021a）。「日本近代文学」と「アイヌ文学」、それぞれが別個のディシプリンとして捉えられ、個別の作家論はあれども——関係史的な視点から必ずしも十分に論じられてこなかったからだろう。その弊害として、マイノリティを制度に囲い込むパターンリスティックな言説構造が不可視化されてきたのではないか。

先述の鶴田知也は、同人誌『小説』1 巻 2 号に発表した「コシャマイン記」（1936）で第 3 回芥川賞を受賞するが、背景には、菊池寛の強い働きかけがあった。東條愼生が指摘するように、「コシャマイン記」では、史実のコシャマインの蜂起とは、直接的には無関係なものとして描かれなが

4 この選挙では山本宣治（山宣）が共産党の推薦を受けつつ労農党から立候補して当選した。山本は翌 1929 年に暗殺されてしまうが、山宣の死は労働者・農民のための病院を作る戦前の無産者医療運動の発火源となる（北海道勤医協歴史編さん委員会（1985：68-70））。ちなみに貝沢（新井）幹子への取材によれば、貝沢正は山宣を私淑していた。

ら、視点人物の行動範囲を史実として重ね合わせるものとする事で、蜂起のリアリティを伏流のごとくに張り巡らせようとしている（東條 2014a：484）。「ペンケル物語」でも描かれたアイヌ内部の対立は、むしろ、当局の弾圧によって物理的に壊滅せしめられたプロレタリア文学諸党派の対立のアレゴリーとして表象され、検閲による弾圧を見越して和人との直接的な対決の描写は回避されている。

「コシャマイン記」は旧約聖書に倣った叙事詩的文体でアイヌの口承文芸を表現することで、「当時の中国侵略に対する批判と同時に日本植民地主義の歴史的過去への批判でもあり、つまりは当時の日本における北海道開拓の歴史をアイヌの目線によって神話の起源に遡って、懐柔と裏切りの歴史として裏返してみせた」（東條 2014a：488）。今日からすれば、この処理は皮肉にも、作中でのアイヌ文化と実際のアイヌ文化の間に少なくない乖離を生んだ。鶴田自身、後に作家として翼賛体制に加担することとなり、そのこともあってか戦後はほとんど小説の筆を折って、農業運動指導者としての道を歩まざるをえなくなった。表象を介して、周到的抵抗をも包摂してやまないパターンリズムの重力が、いっそう明瞭に可視化されてくるというわけである。

3、戦後の被差別部落解放運動との連帯

『勇者たちの道』がもう一つのハイライトとするのは、戦後なされた新冠御料牧場の解放運動である。なにせ、「戦後のアイヌ解放運動は土地闘争で火ぶたを切りました。アイヌが真っ先に要求したのは「先祖の土地を返せ」ということでした」（石井 1993）と書かれているくらいで、1946年に設立された北海道アイヌ協会も、まず直面した課題は土地闘争であった。初代理事長の向井山雄らは、北海道旧土人保護法によって「給与」されたうち4割にも及ぶ土地が、アイヌの管理のもとになかったため、それらを耕作していた和人富農からの返還を求めた（榎森 2007：518）。GHQの主導した農地改革法の「給与地」への適用除外を要請し、アイヌが強制移住させられた新冠御料牧場の全面解放をも求めたということである。これらの闘争はいずれも、GHQの最終的な認可が得られなかったために満足のいく成果を生んだとは言い難く、買収された「給与地」の面積は宅地を含めると約2400町歩、関係したアイヌは1068名、割合としては全給与地の26%、農地としては34%にも及んだ（北海道 1957：246）。

このことが契機となり、「敗戦直後という社会全体の混乱期、厳しい民族差別状況などもあって、アイヌ協会の活動は停滞し、開店休業状態に陥ってしまった」（竹内 2020：68）ことから、1950年代はアイヌの活動の「空白期」として位置づけられるに至る。1956年に厚生省が地方改善事業の予算を組み始め、同和地区に共同浴場や共同作業場等を設定し、環境改善事業に取り組み始めた（同和行政史編纂委員会 2002：21）。こうした一連の同和对策事業の流れを受けて、道や市町村がアイヌの状況を調査し、それが刺激となって1961年に社団法人という形で北海道アイヌ協会が再建され、主にアイヌに対する福祉対策の窓口としての機能を担うことになる（竹内編著 2004、新

井 2014)。

特筆すべきは、部落解放運動との連帯が模索され、実際に二風谷がモデルケースとなってきたことだろう。先行研究でもこの連帯は着目されているが(東村 2006: 302)、どちらかといえば「北海タイムス」等当時の主要紙で報道されるアイヌ政策の変遷を「主」とするなか、「従」として記述されている印象は否めない。そのため扱われている文脈を、もう少し掘り下げてみよう⁵。

貝沢(新井)幹子は部落解放研究所の雑誌『部落』の読者欄で「ここにも私達アイヌと同じ苦しみ……差別にたたかい抜いている方々がおられることを知り、心強く感じました。(……) 三百万人の未解放部落の人びと、一万人のアイヌ、お互いに就職の門を閉ざされ、結婚の自由をうばわれ、貧苦にあえぎ、同じ日本人でありながら差別され軽蔑されています。お互いに手をつなぎあって、差別からの解放に、部落解放にたたかきましょう」(貝沢 1962: 96)と、連帯の必要性を訴えた。彼女がこうした投書を行うに至った背景には、父の貝沢正が、1950年代末から60年代前半にかけて頻繁になされた厚生省や北海道民生部の視察に同行したり、「アイヌ」は「勤労意欲に乏しい」と発言した北海道知事(当時)の町村金五への憤りを手稿に書き残したりしていたことが挙げられる(新井 2016: 139-147)。

道は国に働きかけ、1961年度から厚生省の地方改善整備補助金のなかに「ウタリ福祉対策費」(不良環境地区改善施設整備費補助)を計上し、国の支援によって生活館、共同浴場などの整備を開始した(田端&桑原(監修) 2000: 83、新井 2016: 144)⁶。これは5カ年計画として進められ、総予算は2億円で、3分の1が国庫、残り3分の2は地元市町村が分担、1集団20世帯以上のコタン20地区が事業推進地区に指定されたのだが、モデル地区の二風谷コタンの指導者として、貝沢正は言及されている(菅原 1966: 209-211)。貝沢は水平社の活動家と共闘しながら、部落解放大会等でアイヌの窮状を訴え、被差別部落民の例を出し、生活館で教えられる職業教育がクマ彫りに限られることから、かえってアイヌ差別を強化させる現状をも指摘し、内実にまで踏み込んだ提言を行っている(菅原 1966: 211、219)。その際、石井清治らと交流し、情報交換も行っていた。むろん「階級的組織化」はアイヌ自身の要求、という一面もあったのであろう。

石井は『部落』にそのものずばり、「北海道の未解放部落=コタン その貧困と差別の実態」(石井 1965a)というルポをものしている。そこで石井は「北海道には未解放部落がない」と言われるが、「貧困と身分差別にかえて人種的偏見という、三重の苦しみに喘ぐこの「旧土人」部落こそ、未解

5 セトラー・コロニアリズムと「北海道文学」および向井豊昭の仕事により焦点を当てた岡和田2023でも、別角度からこの掘り下げは行われている。

6 ただし匿名の査読者より、用語としての「ウタリ福祉対策費」が使われたのは1970年代からの回顧的な名指しによるものではないという話も寄せられた。だが、そうだとすると、北海道開発者協会の広報誌でアイヌ政策の取組状況を紹介・確認する際、「アイヌ関係者からの要請を受け、昭和36年に厚生労働省予算の地方改善施設整備費補助金の中に、「ウタリ福祉対策費」が計上されたことを契機に、北海道は国の紫煙を得ながら生活費の整備などアイヌの人たちの福祉向上の取組を本格的に開始しました」(井之口2014: 30)とあるように、用法としてはすでに定着を見ている。

放部落でなくなんであろう」(石井 1965a: 21) と述べている。実際には北海道にも、本州から部落差別は持ち込まれていたうえ、差別戒名という形で部落差別の論理がアイヌに関しても適用された事例が近年の研究で判明している(計良 2013)。石井の見立ては寓喩ですらなかった、というわけなのである。

実際、貝沢と石井が交流するようになったのは、石井 1965a を読んだ貝沢が手紙を出したのがきっかけであった⁷。石井の側も貝沢正との交流を新聞に書いていた(石井 1988b)。石井は堅田精司経由で「アイヌ解放運動で一九二七年、当局にマークされた」という貝沢久之助について調べていたのだ。違星北斗とは異なる文脈での水平社運動への共感、「あるいはマルクス主義潮流とのつながりがあった人ではないかと気になって」のことである。正は久之助について石井に詳述し、彼が「天皇制のもとで同化教育とともに、軍人精神をたたきこまれ」て「よい日本人になろう」と奮闘した「明治のアイヌ」だったと教えられる。予想とは真逆の回答に石井は衝撃を受け、当惑した。しかし、久之助のケースは「よい日本人になろう」とするアイヌでさえも当局が活動家とみなして目をつける、そういう状況を雄弁に物語るものではないか。この手の偏見は戦後も、抜本的には変わらなかったからである。

4、1960年前後のアイヌ表象と、それにまつわる桎梏

ちょうど1950～60年代は、戦後の北海道にヨーロッパ的な“異郷”のイメージが投影され始めた頃でもあり(喜多 2005: 8-13)、風巻景次郎の「四十度圏の幻想」(1947)や「北の詩精神」(1955)に代表される地理的・自然誌的な条件から、北緯四十度圏と北海道の類縁性が論じられるようになり、その観点から「日本近代文学」における「北海道文学」の位置が取り沙汰されるようになってくる(小笠原編著 1983 等)。1953年から1年余りにかけてHBCラジオで和田謹吾の語る「北海道文学風土記」が放送され、この内容は『風土のなかの文学』(1965)としてまとめ、「北海道文学」の支配的なナラティヴを形成するに至ったが、東條慎生が着目するように、本書は単に先駆的なだけでなく、戦時下にプロレタリア文学が弾圧されながらも「農民文学」は満州開拓という国是に乗って全盛期を謳歌したものの、戦後はその流れが途絶えたと指摘しており(東條 2014b: 770-771)、新たな寄辺を欲していた。1955・56年には佐藤喜一『北海道文学史稿』が出版、カノンとしての「北海道文学」のあり方が歴史的・理論的な視座から整備し始められた時期のことである。

しかし、かような議論のなかでは、わずかな例外を除いてアイヌは議論の主題として扱われなかった(喜多 2005: 13-17)。あるいは「アイヌを扱った文学」として、ジャンルの一角を占めるにとどまる。こうした傾向は理論や批評のみならず実作においても顕著で、伊藤整・船山薫・木村不二男の作品を収めた『北海道文学選』(1946)はもとより、北海道文学者懇話会が編纂して木村が序文・和田

7 新井かおりへの取材に基づく。

が解説を担当した『北海道文学代表作選集』（1956）にも——収録作には中沢茂「こわれた時計師」ほか佳作もあるが——アイヌを主題とした作品は収められず、全体としては、ほぼ関心の埒外にあった。

後者に参画した釧路の同人誌『北海文学』（鳥居省三主宰）連載の原田康子「挽歌」は、この年に単行本化され一大ベストセラーとなり、翌1957年には五所平之助監督により映画化、北海道観光ブームの火付け役となるものの、『挽歌』にアイヌだと名乗る人物は登場しない⁸。原田自身、旅行誌において「ロマンティック」なアイヌは博物館のなかにおらず、実際のアイヌの姿を見たら幻滅するものと述べ（原田1959）、「観光のまなざし」に収まりきれない異物としてアイヌを捉えていた（東村2021：68）。異物としてのアイヌが不可視化されるのと軌を一にするかのように、観光地においてはしばしば、観光客の好奇心に訴えかける形で、多くは和人の興業主による曲解した見世物として披露されることになる（新井2016：139）。

こうした「状況」がある一方で、アイヌ自身によってどういう言葉が紡がれてきたかといえ、1946年に、高橋真による『アイヌ新聞』が創刊されていることは無視できない。高橋は民族の団結を訴え、悪辣な和人を舌鋒鋭く糾弾し、他方で違星北斗・バチラー八重子・森竹竹市といった歌人の仕事を紹介。またGHQに期待をかけて和人の管理下にあった「給与地」の返還等を訴えた。今日での積極的差別是正策（アファーマティヴ・アクション）の先駆けとも言える道庁へのアイヌの登用や、ユーモアを交えて新冠御料牧場の解放を訴える記事が紙面に踊り、またGHQの圧力による『北海道新聞』のレッドページをも批判してみせた。

『アイヌ新聞』は5号でいったん廃刊、発行元の名を「アイヌ問題研究所」から「アイヌ新聞社」に変えて同じ名前で再出発し、1947年の13号まで発刊されたものだが、こうした経緯が雄弁に物語るように——目指すところは少なからず共通しながらも——高橋はアイヌ協会としばしば対立した。一つの背景には、『アイヌ新聞』が共産党と浅からぬ関係にあると見られたことが挙げられる（合田2021：86）。

第二次世界大戦後に非合法組織としてではなく、合法的な政党と認められた日本共産党は、戦後初の総選挙で214万票・5議席を獲得したが、うち1議席は北海道からの当選者（柄沢とし子）だった（西舘仁追悼集刊行委員会1994：303）。GHQが主導した民主化計画によって、共産党を主敵とみなして成立した治安維持法等が廃止、1946年2月の第5回党大会では戦前の12倍近い7000人あまりの党員を獲得、第二次農地改革を「戦前以来の地主制が天皇制とともに温存した」ものとみなし、積極的な抵抗が打ち出された（中北2022）。こうした文脈において共産党が積極的に関与したのが、大狩部の「給与地」解放闘争であった。

8 『挽歌』刊行と同時期には、八森（1957）の知里真志保がアイヌ語校閲を手掛けた詩集が出版されていたり、十津川（1958）の「アイヌ部落生まれの看護婦作家」と銘打たれつつ「ケア」の主題をいち早く追及した小説も出たりもしているが、それらは北海道観光ブームの影に隠れてしまった感も否めず、再評価が求められる。

日高門別では、美原、豊田コタンの人たちが団結して「給与地は相続による以外は譲渡できない」と定めた「旧土人保護法」が農地法に優先する特別法であることを主張し、厚別川をはさんで隣接する新冠村（当時）大狩部にある田畑を実力行使で耕作するなど烈しい土地奪還の運動を起こしました。

この大狩部旧土人給与地解放闘争は、日本共産党が全面的に支援し指導したことで知られ、アイヌは和人貧農との連帯を結び、富農の脱税や隠し田の摘発、新冠農地委員会への大衆的な抗議行動など、重層的な戦術展開で幾度も優勢に立ち富農たちをふるえ上がらせました。（石井 1993：18）

石井はこう端的に総括しているが、そもそも大狩部の闘争が言及されるケースが、石井が書いたものを除いて、ほぼ存在しないというのが現状である。それこそ近文アイヌ「給与地」闘争に比べ、研究が更新されているとは言い難いわけだ。「日本共産党が全面的に支援し指導した」ことである種の色眼鏡で見られ、かつ闘争そのものには敗北してしまったから、状況を総括しづらいのだろう。何分石井自身、「アイヌと和人の肥柄杓合戦」（石井 1965a）と形容するほど事態が泥沼化していたのだから、余計にである。

アイヌと共産党の関わりは、これまで積極的な研究対象とはされてこなかった。例えば、日本共産党道委員会アイヌ人権チームが編纂した『アイヌ民族の先住権を考える』（2021）でも、現状のアイヌ政策に関するトピックはきちんと扱われており、前向きな取り組み方であることは伝わる。党の理論誌『前衛』でも北原モコットウナシと紙智子との対談が、大きく紙幅をとって掲載されているが（北原&紙 2024）、だからといって党としてのアイヌとの関わり方がどのように移り変わってきたかの沿革に関する具体的な記述はほとんどない。党内でのアイヌ政策の移り変わりは、理論的な学習の対象とは充分になされていないのが現実なのであろう。

しかし、現在の「アイヌ民族の一部を内部に組み込んだ産官学連携の共依存構造」としてのアイヌ政策推進会議が、アイヌ民族の権利には冷淡である一方、観光の推進には執心し、結果としてヘイトスピーチ（差別煽動表現）の蔓延ほか様々な問題に十分な対応を取っていないことに鑑みると（東村 2021：154-159）、北海道ウタリ協会（当時）が1984年にアイヌ新法（案）を採択する10年以上前の1973年11月、政府綱領にアイヌ民族の権利保障を盛り込んだ日本共産党のアイヌ政策を再検討する意義はあるだろう。

5、1972年以前の日本共産党によるアイヌ政策

日本共産党は1972年11月、「アイヌ系住民に対する人種的差別をなくし基本的人権を守る特別措置法」の草案を発表した。その流れで翌年、日本共産党第12回党大会の政府綱領に、アイヌ民族の権利が含まれたわけである。追って日本社会党がより詳細な政策方針を掲げ、報道によって「ア

イヌ問題」への世間の関心が惹起されることで、「国家とアイヌの交渉における定着した制度的ルートとして、ウタリ協会の位置づけは強化された」（シドル 2021：224）。

共産党に関しての経緯はこうだ。当時、日高にはアイヌの共産党員が多かったが、アイヌ出身の党員は目立たず、在日朝鮮人や被差別部落については綱領に盛り込んでも、アイヌに対しての対応はなかった。加えて党のなかでもアイヌ差別はあり、かつ支部でも地区単位でも、アイヌの要求は取り上げられてこなかった。“一言語、一民族”というスターリンの民族規定論が崩れ去った後、石井がアイヌ政策の初稿を執筆、史学研究者の井上司が第二稿を仕上げた。このとき、この二稿をもって動いたというのが、日本共産党北海道委員長であった西舘仁である。

西舘は北海道日高郡三石村（当時）の出身で、東京地方裁判所書記官として働いていたが、1932年に治安維持法違反で逮捕され、1940年に満期出獄した翌年41年には太平洋戦争の開始を受け予防拘禁された経歴の持ち主である。彼は戦後の回想で、日本共産党の第六回全国協議会（六全協）が開催された1955年まで、党内の空気は「家父長的、官僚主義的指導が強く、下級党員が、たとえ党発展のためにと思っている意見であっても、上級幹部や上級機関に対する批判が含まれていれば、「アレは反幹部的」だとか「反機関的」だとか批判されて意見をのべることもできない」状態が続いており、「とくに北海道では、それがひどかった」（西舘仁追悼集刊行委員会 1994：41）。こうした風潮のなかで、六全協以降、決然と党批判を行った者の一人に、原田了介がいたのである。

六全協を特徴づけるのは、「極左冒険主義」の否定である。つまり地下活動や武装闘争路線が否定され、「民族解放民主主義革命に向けて大衆との結びつきを強めるとともに、社会党や労農党との統一行動を実現しなければならない」との主張がなされた（中北 2022：196）。これはラディカルで自己犠牲的な活動家を切り捨てたものともいえ、統一戦線のために「左翼のセクト主義」や「家父長的な指導」が自己批判された。

六全協はある種のニヒリズムを生み出した。体制との妥協、融和であると同時に、武装ゲリラ・山村工作隊や警官隊との衝突によって生まれた“同胞”の死を、無意味なものと受け止めるような“空気を醸成させたのである。やがて、それは新左翼の誕生にもつながる。六全協が与えた影響を扱った小説として、ベストセラーとなった柴田翔『されど われらが日々——』（柴田 1964）がよく知られるものの、これは東京大学が主たる舞台であり、北海道の状況とは、ほぼ無関係だ。

六全協とアイヌをめぐる状況の内在的論理を描いた、管見の限り唯一の小説が向井豊昭「チカパシ祭り」（向井 1967）である。「アイヌ祭りを観光と結びつけ、祭りの意義をゆがめている」、「オレたちの英雄をしのお祭りにシャモたちは口を出しすぎる」というアイヌ青年たちの反対に対する町の観光協会の場合当たりの対応が仇となり、1962年度よりシャクシャイン祭りが中止となった一件（菅原 1966：129-131）が着想源となっているものと推察される。

しかし、この小説において、シャクシャイン祭りを擬した「チカパシ祭り」への違和感を口にして反対の声を上げるのは、「青年」ではなく、静内高校と思しきS高校の女子学生・富美子であ

り、彼女は自分がアイヌだとカミングアウトしていない、いわば「サイレント・アイヌ」だ（石原 2020）。彼女に相対する立場として、三つのタイプの（現・元）共産党員（作中では「前衛党員」）が設定されている。

まず、新米の音楽教員・雨森。もともと「言語を共有していることは民族の条件」というスターリンの規定を、スターリン批判の後にも引いてくるほどには教条主義的だったが、富美子らと意見を交わすうちに、「チカパシ祭り」をめぐる矛盾に気づき、本当は誰が主体であるべきかという迷いを抱き、複雑な「状況」を理解していく。次に、雨森が所属する党細胞の仲間・石木。彼は 1950 年のレッドパージを経験しているにもかかわらず、「今はアイヌはおろか、和人（シャモ）とのつながりだって稀薄なんだ。こんな状況で反対運動をやったら、おれたちはトロツキストに成り下がってしまう」と、「チカパシ祭り」に反対の声を上げることに及び腰となっている。そして最後に、石木に「反党修正主義者」となじられる笈田だ。笈田は雨森よりも年長の者として描かれており、山村工作隊に参加し、「辺地での過重な生活、警官隊との軋轢」で身近な友人を何人も失った。それから党と決別し、大学に戻って教員の資格を取り、同時に考古学的な見地からのアイヌ研究に没頭する。その研究が、結果として「チカパシ祭り」を下支えするといった矛盾が、作中では掘り下げられるわけだ。

小説は概ね雨森の視点で描かれるが、時折、笈田や富美子の視点に推移する。「アイヌの解放なくして、アイヌ文化はあり得ない」ことはわかっていながら、研究や「観光」のイニシアチブがアイヌのものとなれない複雑な状況と、そこに支援者としてコミットメントする共産党員たちのあり方が書き分けられている。

6、新冠御料牧場解放闘争に関する日本共産党の公式見解

もちろん、「チカパシ」（アイヌ語で「勃起」）という名前が当てられているように、小説内においてシャクシャイン祭りそのものが、小説内でのコントロールがしやすいよう、意図して戯画化されている側面は否めない。しかしながら、しばしばアイヌを置き去りにしてなされてきた「観光」や支援の空回りする感覚は書き込まれており、単純な図式を逸脱する。

向井は石井（1965a）に刺激を受け、石井のルポでは詳述されていないアイヌの子どもたちをめぐる悲惨さわまりない現状を紹介したことがある（向井 1966）。そこでは不良環境地区改善事業に際して、市井のアイヌから「自民党じゃ、駄目ですね。」との実感が漏れていた現状までもが書き込まれていたし、他方で「（1965 年の 11 月に）京都で行われた全国高校生部落問題研究集会で、切々と差別の現実を語ったアイヌの女子高校生の心を、わたしたちは空しいものにしてはならない」とも書かれており、水平社への共感を述懐する森竹竹市に対する言及も添えられていることから、石井や貝沢正らと文脈を共有し、さらに掘り下げようとしていたことがはっきりわかる。

「自民党じゃ、駄目ですね。」という実感がアイヌにも共有されていたのは間違いないが、いざ、

どの程度、共産党員がアイヌの状況にコミットメントしていたのかということ——向井が小説として記録しているように——党の中心的な争点とは、長らくみなされてこなかった。西館が編集責任者をつとめた『北海道：進歩と革新の運動史年表』（ほっかい新報社史料刊行委員会 1984）は、日本共産党の活動史を中心に据えながらも、より広範な読者層をにらんだ広義の労働運動史として編まれたものだが、この本には 1971 年 10 月の「共産党道委員会にアイヌ問題検討会をおく」という項目まで、アイヌに関する言及はない。実際、党中央の機関誌『前衛』に発表された党による公的な歴史認識（日本共産党中央委員会 1984）においても、アイヌに関する記述は見当たらないのだ。ただし、新冠御料牧場の解放運動については、次のようにしっかり明言されている。

戦前の戦闘的農民的運動をうけつぐ、鷹栖村の荒運治・量太郎父子を先頭とする土地解放の闘争は、上川から北見、空知に広がった。浦河町では原田了介を中心に新冠種畜牧場の、静内では大門隆三らによる新冠御料牧場の解放闘争が勝利した。こうしてたたかひのなかから、四六（昭和二十）年二月、北海道農民組合連盟（委員長五十嵐久彌）が結成され、翌四七（昭和二十二）年二月には、日本農民組合の再建とともにこれに加入し、日農北海道連合会となり、二万人の農民を結集した（日本共産党中央委員会 1984：105）。

高らかに「新冠御料牧場の解放闘争の勝利」を謳い、これが日農（現・農民運動全国連合会）の北海道における結集につながるものとして位置づけられている。すなわち、農地改革によって天皇や地主のものとされていた農地が「解放」されたことは重視されていながらも、解放された土地がもともとの所有者であったアイヌのもとに返されたかどうかは、ほとんど考慮されていなかったのである。「階級的組織化」されるはずのアイヌが農民運動のなかに包摂されてしまい、和人との民族的な差異、歴史的な非対称性が——少なくとも、アイヌの名を出さないくらいには——無化されていたわけだ。

先述した「チカパシ祭り」で向井は、党中央の権威に唯唯諾諾として従う石木に、「君（注：雨森）はまだよく知らんだろうが、アイヌの経済的地位はおそろしく低いんだ。彼等は、我々に予測できぬほどの劣等感を持ち、アイヌと言われることを嫌悪している。みんな、貧乏のせいなんだ。だから、おれ達は階級的な視点に立ち、彼等とつながらなければならない。プロレタリアとしての連帯的行動を展開し、共産主義社会を建設しなければならない。アイヌ文化に誇りを持って彼等が対することのできる日は、革命の彼岸にあるんだ」（向井 1967：19）と言わせているが、その主張は同化主義とあまり変わらない。小説が表象した背景が具体的にどのようなものだったのかを考察するため、中心的な役割を果たした原田が、いかなる闘争を行ったのかを確認してみよう。

7、大狩部旧土人「給与地」闘争の顛末

「大狩部旧土人給与地解放闘争顛末記」（石井 1970）では、門別町と新冠町をまたぐ厚別川筋のコタンをめぐる解放闘争が詳述されている。中心的な活動家は、豊田の厚別源治と美原の海馬沢富吉であった⁹。大狩部旧土人「給与地」は、実質的な持ち主であった和人の「小作人」が、比較的肥えていない土地を和人貧農に転貸している状態となっていた。1948年3月、厚別源治ら12名の給与地の「強制買取」が通知された。厚別や海馬沢らは異議申し立てを行ったが却下された。

アイヌ協会による「それまでの陳情政策がことごとく失敗した後」、厚別や海馬沢らコタンの貧農層は、日本農業組合や日本共産党を頼ることにした。戦前の小作争議の伝統を継承するがゆえ、運動の経験豊富で实际的に思われたからである。1948年7月、マッカーサー書簡に基づいて発行された国家公務員・地方公務員の団体交渉権と争議権を剥奪する芦田政令201号への反対運動に参加していた伊藤（川崎）昭夫が、そのまま専従の活動家として豊美コタンに住み込んだ。「赤旗」1948年8月10日号では、国鉄北海道の新得分会によるストライキが全道に広がると報道されていたように、党中央においても北海道でのゼネストは注目を集め、その流れでコタンに住み込むというのは、後の新左翼に見られる「辺境」への「退却」を先取りしているかのようである（太田 1973）。

伊藤は日農の分科会を組織し、アイヌ協会の理事でもあった海馬沢をトップに据え、陳情ではなく抗議と富農の「かくし田」摘発に乗り出した。このとき支援を行ったのが、日本共産党の日高地区委員長であった原田了介であった。和人の富農を食糧管理法・作付統制違反および脱税で告したのである。かような経緯を記述する石井の筆致にはヒロイズムが滲むものの、それを措いても海馬沢らアイヌが名を捨てて実を取り、具体的な敵を前に和人貧農と団結して戦ったのは間違いないだろう。

原田は1947年に浦河町議に当選していたが、この頃、「われわれの浦河町だけでもいいから、独立税として、山林税をかけるためにたたかおう！」と訴えている（原田了介 1949）。どういう文脈なのか。周辺の町村のなかで、新冠町と静内町のみ圧倒的に保有林が少ないのが悩みの種だった。理由は3万町歩もの新冠御料牧場があるからだとはっきりしており、それらの解放に乗り出すのと同時に、「農地改革が不徹底であるため、山林などがそのまま地主の手に残されてしまっている」土地に山林税をかけることで、資本家からの徴税手段にしようとしたのである。当然、町議会議員26名のうち、14名は「山持ち議員」で、しかも共産党議員は原田だけ。強固な反対があるなか、なんとか審議を通過させたという。日本共産党は「あらゆる農林用原野の完全な解放と農業管理」を綱領でのスローガンとしていたが、原田の戦略はこうした方針ともバッティングせず、かつ和人富農にもダメージを与えられる優れた戦略だったと総括できる。

9 豊田コタンと美原コタンは、両方を合わせて豊美コタンと呼ばれる。

「かくし田」摘発は功を奏し、形成はアイヌ側へと有利になった。けれども、農地買収に関する異議申し立てまでは認められず、和人富農とアイヌとの闘争は、どちらが同じ土地を先に掘り返すか、さらには文字通りの「肥柄杓合戦」という泥試合にまでなった。また、新冠農地委員会は明らかに和人側の肩を持ち、富農の側が繰り出した遅延戦術を容認した。このため、闘争が「給与地」の農地改革の適用除外を道や国に認めさせるには至らず、敗北を余儀なくされたわけである。

8、裏側・厚賀診療所の創設、新左翼からの糾弾

けれどもこの闘争は、直接的な「勝利」とは別の成果を生んだ。農民とアイヌの「階級的組織化」によって病院が生まれたのである。当時、厚賀には開業医はあるにはあったが、アイヌが病気になって往診に来てくれないばかりか、患者が使用した薬の紙を（和人には衛生上の理由から再利用しないのに）アイヌに向けては平気で使う、といった差別がまかり通っていた。そのなかでアイヌは「たたかいの中で人権にめざめて、「人間らしく扱ってくれる病院を自分たちでつukれないもんだろうか」と、和人と協力し、1949年に厚賀診療所を打ち立てた（石井1988a：5）。このとき中心になったのが、土地闘争のリーダーであった海馬沢で、診療所のモデルとなったのは、前年に設立した日本共産党浦河診療所（現・勤労者医療協会浦河診療所）。栄養失調からくる疾患が広がるなか、和人とアイヌを分け隔てせず、貧しい農漁民の健康を守るのが目指されたのだ（北海道勤医協歴史編さん委員会1985：164、560）。つまり戦前からの連続性をもって功を奏したのは、土地をめぐる闘争よりも、無産者医療診療所の流れを汲んだ勤医協の運動だったのである¹⁰。

昭和初期から「アカ」だと警察に睨まれていた原田了介は、獣医という職業の特殊性に加えて、太平洋戦争開戦後や予防拘禁を危惧して往診依頼があっても出向かず、「酒飲みのグウタラ獣医」を装い、監視の目をごまかし続けていたものの、敗戦間際の1945年5月には「断り続けていた了介も遂に」大政翼賛会日高産業委員に名を連ねることになり、この経験が原田に影を落とした（原田シゲ・原田克1983：93、101）。そうした不満もあってか、彼は戦後すぐに日本共産党の再建大会に出席して党員となり、浦河細胞を設立、1947年には浦河町議に当選し、以降8期にわたって精力的に活躍することになる。

原田は1970年には、革新統一候補として浦河町長選挙に出馬した。結果は落選だったが、このときの選挙戦で道内から支援に集まった活動家のなかに、「ところで、アイヌに選挙権はあるのかい」と問う者があり、それを聞いていた傍らのアイヌの活動家は「ああ、この人たちのなかでも……と思ったとき、私は血の凍る思いをし目の前が真っ暗になった」と漏らしたという（井上1982）。この逸話は原田も知っていただろう。晩年の原田がアイヌ研究に注力するようになるのは、「進歩的な研究者」のなかにすまみ見受けられる、単一民族イデオロギーへ本腰を据えて主眼的に対峙す

10 あるいは、労働者が積極的に関与してきたという意味では、健康保険法をめぐる闘争の延長線上に位置づけることができるかもしれない（村上1965）。

る必要があったからである。原田は「口角泡を飛ばす徹底した議論を好み、妥協を知らない人」で、「勤医協運動でもなんでも住民運動が基礎になればダメだ、決めたことは必ず実践しなければダメだ」と言い続けたというが、表層的な議論だけでは不十分だと考えたからだろう（北海道民主医療機関連合会（2006 = 2008 : 9））。

こうしたアキレス腱を鋭く突いたのが新左翼であり、石井の「大狩部旧土人給与地解放闘争顛末記」は太田竜による支離滅裂ながらも辛辣な糾弾の対象とされた。太田の『アイヌ革命論』の冒頭は、石井への攻撃から始まっている。これを石井は「日共代々木派の石井がやっている解放運動はアイヌをダメにしている。アイヌが武器を持って起き上がらないのは、あんな奴がいるからだ」という、共産党に対する新左翼からの党派的な非難として受け止めた（石井 1988a : 9）。

現物を確認すると、太田は石井が「明治以降アイヌ政策の根幹をなした勸農策は「風雪 100 年」を経ないうちに破産した」とし、「偽まんに満ちた『旧土人保護法』がいかようにして最後の息をひきとったかを苦痛のうめきをもって証言している」（石井 1970 : 11）と総括した点を引き合いに出し、「旧土人保護法は息を引き取った」と書かれた点を、「一つの種族としてのアイヌ民族は滅亡してしまった」と断定、日本共産党の指導のもとアイヌは「脱アイヌ」し、「完全な日本国民の一員」となることを促されているのだというのである（太田 1973 : 8）。共産党のパターナリズムへの批判は妥当であろうが、新法による更新を目指すことなくし、「征服者日本民族のからだに突きささった小さな「トゲ」」であるからして、その「トゲ」を抜くべきではない、と旧土人保護法を擁護する太田の主張は、アイヌをめぐる状況を直視せず、別種の空想的パターンリズムに陥っている点是否めない。

その後に起きた「アイヌ」を大義名分とした新左翼の爆弾闘争が、どこまでも和人中心主義的に空回りし、やがては結城庄司のような「同志」の離反や批判を招くことになったのも当然の帰結であろう（結城 1980）。厄介なのは、太田のような「マイノリティ憑依」へのバックラッシュが、ソーシャルメディアが後押しする現代のヘイトスピーチ（岡和田・ウィンチェスター編著 2015）の屋台骨となっていることである。

9、「アイヌ病院」と『森と湖のまつり』

資本主義の発展と継続に伴う本源的蓄積と差異化のプロセスが、レイシズムという形で制度的・社会的に規定されること。それがセトラー・コロニアリズムのイデオロギーとしての同化主義へと回帰し、境界を再生産させていくプロセスの意味するところであるが（バタチャーリヤ 2023）、新左翼による逆張りとしての北海道旧土人保護法の擁護は、図らずしもアイヌの近代の経験におけるレイシャル・キャピタリズム（人種資本主義）としての特性を傍証した。

人種資本主義の根源にあるのが「生政治」の最たる医療だとすれば、「給与地」獲得闘争の敗北を、アイヌの福祉向上へと転嫁させた意義は特筆に値しよう。厚賀診療所は平屋の民家を間借りすると

ころからスタートし、医療器具も顕微鏡と聴診器くらいしかなかった。おまけに、周辺には水道が引かれているのに、アイヌ住民の多かった野深地区は水道の敷設から除外されており、結核・回虫・皮膚病・トラホーム等が蔓延していた。そのため医療体制の整備と並行し、簡易水道の整備というごく基礎的なインフラの確保から始めなければならなかったという（この段落、石井 1988a：7-10、原田シゲ・原田克 1983：131-132）。

問題はそれだけではなかった。診療所設立2年目の記念集会在アメリカ軍によって弾圧されるという事件が起きた。これはワシリー・ズラフィリョフ監督による1945年のソ連映画『奴隷海岸』を上映するという集会だったが、近隣の浜を高射砲演習場として使用していたアメリカ軍が、国際反戦デーに便乗した「アカの病院」が反戦集会を行うとみなして禁令を出し、従わぬものは軍事裁判にかけるとの布告したのだ。にもかかわらず、800人を超える村民が集まり、警察・消防と衝突、結核で入院していた石井を含む8人が逮捕され¹¹、懲役6ヶ月・執行猶予2年が課せられた（石井 1988a：46-57、北海道勤医協歴史編さん委員会 1985：166）。裁判の後に、石井は事務員として復職することになる。

厚賀診療所が、かくも当局から目の敵にされていたのは、GHQとのやりとりを含む「給与地」闘争を抜きは考えられない。厚賀診療所は「アイヌ病院」とも言われるほどに有名で、1958年に出版された武田泰淳の小説『森と湖のまつり』（武田 1995）や、同年公開の内田吐夢の映画版に登場する「アイヌ病院」のモデル（の1つ）であるという（石井 1988a：6）。厚賀診療所に関する闘争がほとんど語られなくなっても、『森と湖のまつり』の一部に、その様子は取り入れられていたのだ。

こと『森と湖のまつり』は両義的な評価を受けてきた作品である。1955年から58年という北海道観光ブームの渦中に岩波書店の総合誌『世界』に連載され、かつ武田泰淳という戦後文学の代表的な作家の仕事という文脈に置かれるということで、長編小説のなかで錯綜する様々なメッセージは、観光資源としてのアイヌの内側からの抵抗の痕跡、「熊と並ぶ観光名物的な風俗小説にとどまり得ぬ重い意味をになっている」（北海道新聞社学芸部編著 1967：195-196）ものだと受け止められた。「アイヌの運命は日本人のひき起こしたものだ。これを広く異人種による迫害、迫害した人間の責任の問題と考えれば、必ずしも傑作とはいえぬ武田泰淳『森と湖のまつり』のモチーフが、武田の中国に対する贖罪観と呼び合い、かつ『ひかりごけ』における実存的主題とも壁一つである事情が納得されはせぬか」（同前 196）というわけである。

この評の文責は、実証的なデータベースの拡充をもって“物量”としての「北海道文学」を示す仕事（木原 1982 等）で知られる木原直彦なのだが、ここで記された「贖罪観」や「実存的主題」が、武田泰淳という個別の作家論を超えて社会に投げ返されたとは言い難いものがある。「観光小説」

11 なお、石井はこのときの騒動をプロレタリア詩のスタイルでも表現している（石井1988a：58-64）

に留まらないという見立ては、「観光小説」性そのものを原理的に批判したわけではなく、批評家と一般読者の受容は「共犯」関係にあった（東村 2006：181-186）。それはアイヌに関する「滅亡」のナラティヴを共有していたからではないか。

『森と湖のまつり』の連載が開始された 1955 年、知里真志保は『平凡社世界大百科事典』に「民族としてのアイヌは滅びた」、「彼らは、もはやアイヌではなく、せいぜいアイヌ系日本人」と書きつけた。むろん、それは反語であり、同化を強要した状況を批判するためのレトリックであったが、現在でもなお公人による差別のために文脈を無視して悪用されており、同時代の『森と湖のまつり』もまた、同種の憂き目にあっている（岡和田・ウィンチェスター編著 2015：16、165-167）。加えて映画版では原作にも散見された西部劇めいたイメージがいっそう強調され¹²、こうした流れは 2014 年から 22 年まで連載されてアニメ化や実写映画化もなされ、道や各種施設も観光のために積極活用している野田サトルの漫画『ゴールデンカムイ』に代表される「エンタメ」における「アイヌ」の一つの類型を形成している（岡和田 2024）。

10、「あいぬ病院記」が記録した他者の物質性

『森と湖のまつり』は観光資源にされて主体性が一顧だにされないアイヌの状況と、「アイヌ」に向けられる差別意識をときに当事者たるアイヌ自身までもが内面化してしまう皮肉をも体现した小説だ。それらを描くにあたり、登場人物に差別について積極的に語らせるのはいいとしても、無神経なマイクロ・アグレッションに事欠かないのが大きな欠陥となっている。だからこそ、むしろ雄弁に語られない細部においてこそ、主体的な語り手たることを封じられてきた「アイヌ」の状況がうかがえ、「アイヌ病院」等はその典型である。

「アイヌ病院」とは、和人の画家である佐伯雪子がアイヌ女性の裸を見るために医者 に 扮 し 入り込む場面を指す。原作小説では、佐伯に見られたアイヌ女性・風森ミツの「背部の毛は、かなり深かった」と形容されつつ、「知恵と誇りにみちた者の、落ち着きがあった」との描写がなされる彼女の眼差しとは「まったく別種の言い分を女画家に語りかけてくるように思われた」（武田 1995：63-64）と書かれている。映画版ではもっと直接的に、若いアイヌの医師が佐伯の変装に気づいて、猛抗議を行うものとなっている。つまり、生政治の最たる場としての医療の現場においてすら、アイヌの患者は瞳と体毛をもって観察者を見返し、あるいはアイヌの医者は倫理に反すると異議申し立てを行うといった具合に、捉え返しがなされるわけである。

鳥羽（2022：122）ではこの場面を例に出し、「アイヌと和人の非対称な関係に基づいた不当な方法も含む取材の過程での体験を織り込みながら形成していったのがこの小説の世界」だと評してい

12 『森と湖のまつり』のクライマックスでなされる風森一太郎と大岩猛の銃やナイフによる決闘は、まさしく西部劇というほかない。そのイメージを「アイヌ」に重ね合わせる際に利用されたのは、作中でも言及される（武田 1995：25-27）和人による創作伝承としてのマリモ伝説「セトナとマニベ」に付随する、メカニとマニベの決闘の逸話だろうと推察される（丹菊逸治への取材に基づく）。

る。佐伯に特定のモデルはないとしながらも（武田 1966）、武田が「ビホロの病院には実際に行って、白衣で医者^{（1）}に化け、アイヌ系の患者を視察した」（武田 1962）と回想していたことを受けての評価である。それこそ「観光」的な詰め^{（2）}の甘さはこの作品にはよく出ていて、作中に森竹竹市の歌を引きながら作者名を落とし、森竹自身から咎められた事例（武田 1968：227）等に典型的で、そうした外側から撫でるような感覚は、石井にとっても大いに不満だったろうと推察される。

石井清治が参画した『北方群』の1号と2号に、「あいぬ病院記」（「アイヌ病院記」表記もあり）という小説が掲載されているが（福澤 1970、1972）、これは厚賀診療所を舞台に、「アイヌ病院」の内幕を『森と湖のまつり』とは異なる形で描こうとした好例と見ることができよう。著者名は「ひだかたかし」とあるが、編集後記にプロフィールの明記はなく、後に勤医協厚賀診療所に勤務した『北方群』にも参加した福澤稔の筆名だと明かされた（福澤 1990）。

『北方群』は刊行の間隔に大きく間があいているためか、「第一話 死のうとした女」の第三節まで掲載されたところで中断したが、後に1971年の勤医協新聞に場を移して書き継がれ、北方群を発行所とする（住所は当時の石井のもので）単行本『あいぬ病院記 炎となりて』（福澤 1990）にて、他の小説や報告文とまとめた形で提示される。なお、福澤は赤平市に生まれ、新冠郡節婦村（当時）で幼少期を過ごし、中学卒業後、夜間高校に学びながら自動車修理工として働いた後、1958年より厚賀診療所に勤務している。1970年には勤医協本部に移り、その後、本格的に鍼灸を学び、1990年時点では勤医協札幌鍼灸治療院院長をつとめていた。

石井は福澤と二人だけの「アイヌ史研究会」を続け、当時の体験を軸に「あいぬ病院記」を書いた（石井 1990）。「あいぬ病院記」は厚賀診療所に新しく赴任した新米看護婦・春江の視点で描かれる小説である。「学院で一、二の成績でとおしてきた」春江は、北海道民医協（北海道勤医協と、民医連がモデル）の札幌センター病院への勤務を希望していたが、勤務地は厚賀に決まってしまう。腰掛け感覚で赴任した春江は、それまで意識してこなかった「アイヌの人」たちに直面して戸惑いを隠せない。看護師は5人しかおらず、誰かが休むと回らない。おまけに周辺の無医村のために30キロも往診しなければならない始末だ。

一日の激務を終えた春江は、急患の電話を受ける。豊美コタンの女性モミから娘のカヨがカミソリで手首を切って死にそうだと言われるのである。呆氣にとられた春江に代わって、「はらさん」をはじめとしたアイヌ青年たちが対応を行う。蜂の巣を突ついたような大騒ぎの後に、処置台に横たえられたカヨは、もはや半死半生の状態だった。

春江は、カヨの顔をまじまじとみた。年は自分と同じくらいだろうか、ほりがふかく、まゆのこい、まくりあげられた腕の肌毛は、自分のそれよりこくはえている。

肌は血の気がひいてか真青になっていまにも死んでいくかのようだ。加代は死んでしまうのだろうか、それが信^{（3）}んじ^{（4）}られない。彼女は^{（5）}どうしてこんなにして自分を傷つけてまで死のうと

いうのだろうか、春江は自分にはとても考えられないことだった。

ただ、いま生死のさかいをたまよいもだえるしんでいる加代をこの手で助けてやりたい生かしたいと願った。(福澤 1972 : 30)

カヨは一命を取り留めたが、人が変わったようになってしまった。その様子に母親のモミも娘にすがっては泣き叫ぶ……。ここで小説は中断しており、なぜカヨが自殺を企てたのかは、『北方群』連載時には明らかにされずに終わっている。

こうした事件は、いかにも「アイヌ病院」のなかで起きそうなもので、福澤がその緊張を小説という形でしか書きつけられないと確信していたことは想像に難くない。ここで注目すべきは、モデルとなる事件が実際に存在したか否かではなく「人種」にまつわる差異化のメカニズムが、おぼろげながらも捉えられていることだろう。

山城むつみは向井豊昭が描くテレビニュースに映された鳩沢佐美夫の「油気のない髪」が、あたかも彼自身の目のようにカメラを正視していると言った(向井 1972 : 45-46)、その物質性にこそ着目した。意識的な反省以前に他者との関係そのものから即物的な形で到来し、「世界」への眺望としての歴史的な加害へ向き合う姿勢を準備させる、そんな物質性である(山城 2018 : 71-73)。「まくりあげられた腕の肌毛」は、『森と湖のまつり』がそうであったように意図して観察しようとした類のものではない。にもかかわらず、それはレイシャル・キャピタリズムの表徴として、同世代でありながらも自らのエリート意識に反省的な視点を向けてこなかった春江に、「カヨをこの手で助けてやりたい生かしたい」と思うに至る物質的な衝動を投げかけたのだ。

11、「脱殖民化」の闘争性を空間的に拡張すること

もちろん、この描写がカヨを人種化して捉えることで、同時代的なステレオタイプをなぞっているのは否定できない。そもそも 1968 年秋に、千歳市で開かれた道民教(北海道民間教育研究団体連絡協議会)でのアイヌ問題分科会の基調報告において、「アイヌの人をどうよんだらいいかということが、教育現場でも日常の中でも、そのことで悩んでいると思うんですよ。「アイヌ」なんてあからさまにいうならアイヌの人たちにどやされますよね。現在の状況はそういう雰囲気があると思います」と延べ、『北方群』がそうであるような反差別の流れに棹さず形で、「アイヌ系日本人」と呼ぶべきだと主張している(福澤 1990 : 300-301)。

もちろん、先述した知里真志保の発言がそうであったように、「アイヌ」という呼称そのものがさながら差別語のように機能してしまっている状況で、国民として「胸を張って誇りをも」つことができるようにとの配慮、方便としての表現である。「アイヌ」とよんで「何だい」というふうな会話ができるようになる時代はくるのでしょうか。今の僕にはわかりませんが、そのような世の中になるように、僕らは「北方群」という雑誌を自前でつくって、その問題ととっくんでいます(福

澤 1990:303) というように、「国民」としての平等は、『北方群』の目指すところでもあったのである。ただ、その危うさに、福澤自身も後に気づき、1990 年の単行本版のあとがきでは、次のような反省の念が述べられている。

私は今だから言うのですが、現代のアイヌの人たちを「アイヌ系日本人」と「 」つきで呼ぶことのあやまちに気がつきました。アイヌはアイヌであり、アイヌ民族でしかなく、それ以外の何ものでもないことに気がついたのです。そして私は、アイヌのことはアイヌ自身がきめることであり、シャモのくちはさむことでないと判断し、私が、まことしやかに「アイヌ系日本人」などといってアイヌの本質をぼかし、アイヌ解放運動に加わっているのはアイヌのためにならないと考え、これまでのいっさいの運動から自から手を引いたことでした。(福澤 1990:457)

アイヌは「アイヌ系日本人」と呼ばれるのに、和人は「シャモ系日本人」とは言われない。こうした非対称性は日常生活に顕れるばかりか、運動においてはパターンリスティックな抑圧として機能し、国民主義としての限界をも画することになる。マチスモへの傾斜を見せがちな運動史では掬い上げられない、複雑な精神の揺れ動きを不特定多数へ向けて表現するはずの文学は、ステレオタイプを再生産する装置となりえてしまう(岡和田 2019)。

他方で、福澤が「これまでアイヌの解放運動がまとまった運動としてとりくまれたことはすくなくかった」がゆえに、『北方群』がバラバラな運動に一石を投じることとなったと、その意義についても明記している。その問題提起には、どのような意義があったのだろうかということで、福澤はウタリ協会札幌支部結成を成果として挙げているが(福澤 1990:458)、『北方群』の文化運動が、アイヌ当事者主体での組織化を生む契機になりえたのだとしたら、国民主義とは別種の「脱殖民化」の文脈に接続していくことが肝要だろう。

中村平は、北海道の「開拓」をも念頭に置きながら、「殖やす」概念としての「殖民」性を強調したうえで、リンダ・スミスらの先住民研究における decolonization (脱植民地化) の概念を「脱殖民化」と訳し、その必要性を強く訴えている。個人間から民族としての集合とも捉えうる「他者」の主体性を否定し、「自治を認めない殖民主義的な力、帝国主義的な力に抗して、他者による主体性の抑圧に対抗していく」動きのことである(中村 2022:54-59)。こうした動きはしばしば闘争的な形を取り、中村の専門である台湾先住民研究の文脈では「抗暴」と呼ばれる。

かような「抗暴」を、より広い文脈へと接続するには、アイヌ民族であり、かつ女性であるという交差性(インターセクショナルリティ)をどう扱うべきかに対する理論的な整理が必要不可欠だろう。大畑凜はアンジェラ・デイヴィスの「闘争の交差性」概念を援用することで、交差性概念の俗流アイデンティティ・ポリティクスの形骸化を退け、新左翼的なマチスモを相対化しつつ、筑豊

時代における森崎和江の思想を、空間的・方法的に開かれたものとして読み直そうとした。このアンジェラ・デイヴィスの姿勢というのは、エスニック・マイノリティであることと、性的マイノリティであることの双方の抑圧の構造を見据え、それに対峙していく姿勢を意味する。言葉を紡ぎ、耳を傾けて聞いて拾い上げること、という文脈をも接続させているわけだが、この枠組みは森崎のみならず、他の対象を扱う際にも有用である。

福澤のテキストに交差性の観点から、生成論的な分析をも取り入れつつ読み直していけば、1990年の単行本版では、カヨは「加代」と漢字表記に改められ、幼年のイメージが払拭されたうえで、自殺未遂の原因が加筆されたことに気づかされる。恋人の男に「アイヌの女は、きたない、すぐ体をゆるすんだ」と迫られた自己の経験に、一部の「給与地」を返すとの名目で「町会議員もやっている地域の大ボス」に強引に体を奪われた母親の体験がオーバーラップしたためだという真相が明かされる（福澤 1990：50-55）。しかも、カヨの貞操を奪った男は、母を蹂躪した男の息子でもあったのだ。

自裁をはかった女性に、アイヌ母・娘の二代にわたって奪われた身体と「給与地」を重ね合わせつつ、そこで可視化された人種化のナラティヴを「脱殖民化」させていくこと。このテキストはそう創造的に再読をせねば、「アマチュア」の手になるステレオタイプの再生産の域を出ないものになってしまう。

そのためには、浮かび上がってきた「肌毛」の物質性へ対峙したことへの戸惑いを、「征服者日本民族のからだに突きささった小さな「トゲ」」として痛みをもって受け止め、「トゲ」による刺激を、加害者意識の屈折とは決定的に異なるものとして、「伏字的死角」を照らし出すサーチライトとなすべく明確化させていくことが必要となる。この「トゲ」とは説明したように新左翼による批判だが、その方向性を組み替えていくというわけだ。

単行本での加筆により、加代の父は、厚別源次郎という名で「昭和二十一年から三年頃におきた旧土人（アイヌ）給与地解放闘争のアイヌ側の中心人物で、美原、豊田コタンのウタリを指導していた先進的な人」として位置づけられていたこともわかる。だが、源次郎は敗北による挫折感から酒に溺れ、四～五年後に酔ったはずみで「美原コタンの東側に流れるボンユク川の橋」から落下して事故死してしまう。

ただ、闘争の過程の連帯で診療所が生まれたわけで、春江は「一人の人物の背景にはとてつもない大きな出来事がかくされていることにおどろいた」。戸惑うばかりだった春江だが、診療所内で盛んだった荒木栄の労働歌「がんばろう」等を歌う「うたごえ運動」に参加し、少しずつ打ち解けてゆく。それだけではない。加代は、アイヌの男性・海馬沢要治が中心となって進めた「コタンはじまって以来の農村労働組合の結成のとりくみ」に積極的に参画する。海馬沢は、春江の赴任した最初の日には「体臭が鼻にツンとにおった」と描写された人物だが、当初は存在した人種化のナラティヴは、「闘争」の過程では——おそらく意図的に——反復されず、むしろ町議父子に対抗する

ものとして形作られる。そして小説は、要治や加代らのアイヌたちが旧土人給与地解放闘争を引き継ぎ、出面賃を引き上げるためにストライキを打つ光景を描出するに到るのである。

二人は壇上にあがり手をふった。またひととき大きな拍手がわいた。

「書記長というものもある。誰かいなか、若いもんがいい」

「加代がいい。加代やれ！」

突然、誰かがさげんだ。加代はびっくりして立ちあがった。皆んなから拍手がまきおこった。

「わたし女だし、まだなんにもわかんないし、こまるわ」加代は自信なさそうにいった。

「女だっていいぞ、加代お前、今回はがんばったし、俺が推薦すぞ」

要治が声をかけた。加代にはそれ以上ことわる理由がとっさにみつからなかった。加代はたまたまさげんだ。

「皆んな、わたしを助けてくれるんなら……やるべし。いっしょうけんめいやりますのでよろしく」

という顔を真赤にして頭を何度もさげた。(福澤 1990 : 72-73)

こうして「あいぬ病院記」第一話は、闘争の勝利で幕を下ろす。第二話では戦時下による天皇制による抑圧によって精神を病んだ芳蔵というアイヌが登場する。第三話では、病院の加藤という事務長が美原コタンのアイヌの要請を受け、コタンに公営住宅を新設する運動を起こす様子が描かれるが、加藤事務長は「この町のたった一人の共産党からでている町会議員」(福澤 1990 : 133)と書かれているとおり、原田了介がモデルと思われる。

この小説が特異なのは、アイヌの運動史が停滞していた時期を、衰退史観として捉えず、「状況」のなかでありえた抵抗の形を、手触りをもって描きあげていることである。言うまでもなく、中央文壇の職業作家の仕事のごとき洗練とは無縁だが、そうした地平からは、まず出てこない「闘争」の空間的・方法的な広がり描かれているのだ。その過程で、あらかじめ打ち込まれた「トゲ」の物質性が、マイノリティへの憑依とは一線を画す表徴として機能する。かような「階級的組織化」を、読み手が「脱殖民化」のコンテクストへ接続させていくことが肝要なのではないか。

現在、とりわけ日本語で書かれた「アイヌ文学」は、作者が「アイヌ」であればいかなる断簡零墨であれ「アイヌ文学」としてカタログ化せんとする人類館事件めいた欲望に対し、十分に批評的な視点を持ちえていない。他方で、フィクションにおいて「アイヌ」は半ばフリー素材として、現実を生きるアイヌとは無関係にエキゾチックな他者として表象され続けている。

両者が共通して閑却するのは、人種化のナラティヴに対する批評性である。ゆえに制度的レイシズムが覆い隠すマイノリティの主体性を掘り上げ、複数的な抵抗のナラティヴを闘争的に再編させていく契機とすることが必要なのだ。「階級的組織化」のうちにも根ざすパターンリズムを解体し、

セトラ・コロニアリズムの暴力を「ポスト＝終わった」ものとせず、「脱殖民化」の契機とすること。「アイヌ民族の一部を内部に組み込んだ産官学連携の共依存構造」が所与のものと化している状況において、「アイヌならざる者の現代アイヌ文学」に求められるものは、まさしくそれを措いてほかにない。

付記

本稿の成立にあたり、日本近代文学会 2024 年度秋季大会での研究発表「『アイヌ文学』と『給与地』闘争——「階級的組織化」をめぐる向井豊昭・石井清治・原田了介の視点から」の反響をふまえた。福澤稔の仕事の重要性は、「アイヌ・先住民研究」編集部が委嘱した匿名の査読者の指摘によって知った。取材への応答やアドバイスをいただいた方々も含め、関係各位に記して謝意を表したい。

参考文献

- 新井かおり（2014）「戦後のナラティブ・ターンから眺めるアイヌの諸運動と和人によるアイヌ研究の相克」『応用社会学研究』56、225-240.
- （2016）「貝沢正による「アイヌ」の再定義：戦後の初期アイヌ施策との応答から」『語りの地平 ライフストーリー研究』1、137-155.
- 有安俊一遺稿詩集出版委員会編（1992）『風の吹く夏：有安俊一遺稿詩集』有安スミ子
- 石井清治（1965a）「北海道の未解放部落＝コタン その貧困と差別の実態」『部落』17巻3号、21-30.
- （1965b）「シベチャリ叛乱と蝦夷切支丹：和人庄太夫について」『北海道地方史研究』55、1-10.
- （1970）「大狩部旧土人給与地解放闘争顛末記」『北海道地方史研究』77、1-11.
- （1988a）『草の根の医療：はだしで住民とともに』ふきのとう舎
- （1988b）「アイヌの小道」『赤旗』1988年9月27日号
- （1990）「なににごとなさざるべからず」福澤稔（ひだかたかし）『あいぬ病院記 炎となりて』北方群
- （1993）『勇者たちの道：昭和期北海道アイヌ運動小史』アイヌ問題を考える懇話会
- （1994）「アイヌ少数民族問題…政党としてはじめて綱領に盛り込む」西館仁追悼集刊行委員会（編）『雪は熱し：真紅の旗 西館仁追悼集』、西館仁追悼集刊行委員会・西館コウ、135-137.
- 「石井清治さんを偲ぶつどい」実行委員会編（1995）『石井清治遺稿集：アイヌ民族の復権をめざして』「石井清治さんを偲ぶつどい」実行委員会
- 石川郁夫（2015）『三好文夫：告発と贖罪・短刀と突き出す腕の勁さ』あさひかわ学研究会
- 石原真衣（2020）『〈沈黙〉の自伝的民族誌（オートエスノグラフィー）：サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』北海道大学出版会
- 伊藤整・船山薫・木村不二男（1946）『北海道文学選：第1巻』青玄社
- 井之口淳治（2014）「北海道におけるアイヌ政策」『開発こうほう』2014年6月号、30-33.
- ウィンチェスター、マーク&ナカムラ、マーサ（2023）「詩味礼賛：好詩家たちとの対話」『望星』2023・10、66-74.
- 井上司（1982）「“わらびの里”で考えたこと」『北海道経済』1982・2、1-2.
- 榎森進（2007）『アイヌ民族の歴史』草風館

- 太田竜（1973）『アイヌ革命論：ユーカラ世界への〈退却〉』新泉社
- 大畑凜（2024）『闘争のインターセクショナルリティ：森崎和江と戦後思想史』青土社
- 小笠原克編著（1983）『日本文学の中の《北海道》』立風書房
- 小川正人（2022）「農地改革」関根達人・菊池勇夫・手塚薫・北原 モコットゥナシ編著『アイヌ文化史事典』吉川弘文館、230.
- 岡和田晃（2014）『向井豊昭の闘争：異種混交性（ハイブリディティ）の世界文学』未来社
- （2018）『反ヘイト・反新自由主義の批評精神：いま読まれるべき〈文学〉とは何か』寿郎社
- （2019）「解説」『骨踊り 向井豊昭小説選』幻戯書房2019、607-622.
- （2021a）「小熊秀雄研究の一世紀」『詩と思想』2021・7、86-91.
- （2021b）「多角的に表出される「同化主義」の制度と歴史を撃つために」『図書新聞』2021年8月14日号
- （2023）「アイヌへの加害の歴史、強制された共生：向井豊昭「御料牧場」を対位法的に読む」『日本近代文学』109、99-116、同論での「浅川義一の孫」を「子孫」と訂正する
- （2024）「「アイヌ・和人問題」としての『ゴールデンカムイ』」「『アナキズム』50
- 岡和田晃&ウィンチェスター、マーク編著（2015）『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新社
- 小熊秀雄（1930）「アイヌ地視察覚え書き」『旅』7巻7号、日本旅行文化協会
- （1935=1991）『新版・小熊秀雄全集第3巻』創樹社
- 貝沢幹子（1962）「アイヌの訴え」『部落』14巻9号、96-97.
- 金倉義慧（2006）『旭川・アイヌ民族の近現代史』高文研
- 柄谷行人（2002）『日本精神分析』文藝春秋
- 川村湊編著（2009）『現代アイヌ文学作品選』講談社現代文庫
- 喜多香織（2005）「戦後「北海道文学」論の中の北海道：ピューリタニズム、ヨーロッパ的な風土、植民地性」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』5、1-20.
- 北原モコットゥナシ&紙智子（2024）「アイヌ差別の歴史——権利回復と人権尊重への前進を」『前衛』2024・6、179-199.
- 計良光範（2013）『アイヌ社会と外来宗教：降りてきた神々の様相』寿郎社
- 合田一道（2021）『「アイヌ新聞」記者 高橋真：反骨孤高の新聞人』藤原書店
- 小正路淑泰（2021）『堺利彦と葉山嘉樹：無産政党的社会運動と文化運動』論創社
- 佐々木昌雄（2008）『幻視する〈アイヌ〉』草風館
- 佐藤喜一（1955）『北海道文学史稿』冬濤社
- （1956）『北海道文学史稿』楡書房
- （1968）『小熊秀雄論考』北書房
- サイード、エドワード（1998）『知識人とは何か』（大橋洋一訳）平凡社ライブラリー
- シドル、リチャード（2021）『アイヌ通史：「蝦夷」から先住民族へ』（ウィンチェスター、マーク訳）岩波書店
- 柴田翔（1964）『されど われらが日々——』文藝春秋
- 新谷行（1972）『アイヌ民族抵抗史』三一新書
- 菅原幸助（1966）『現代のアイヌ 民族移動のロマン』現文社
- 竹内渉（2020）『戦後アイヌ民族活動史』解放出版社
- 竹内渉編著（2004）『野村義一と北海道ウタリ協会』草風館

- 竹ヶ原幸朗（2010）『近代北海道史をとらえなおす：教育史・アイヌ史からの視座』社会評論社
- 武田泰淳（1962）「名作取材紀行43 森と湖のまつり」『週刊読書人』1962年11月5日号
- （1965）「舞台再訪 私の小説から：森と湖のまつり」『朝日新聞』1966年8月18日号
- （1968）「泰淳日本行脚 第一回：風雪百年、輝く未来」『中央公論』1968年10月号、214-228.
- （1958=1995）『森と湖のまつり』講談社文芸文庫
- 田端宏・桑原真人（監修）（2000）『アイヌ民族の歴史と文化：教育指導の手引』山川出版社
- 鶴田知也（1933=1936=2009）『コシャマイン記・ペロニカ物語 鶴田知也作品集』講談社文芸文庫
- 東條慎生（2014a）「裏切り者と英雄のテーマ——鶴田知也「コシャマイン記」とその前後」
- 岡和田晃（編）『北の想像力：〈北海道文学〉と〈北海道SF〉をめぐる思弁の旅』寿郎社、474-514.
- （2014b）「和田謹吾『風土のなかの文学』」岡和田晃（編）『北の想像力：〈北海道文学〉と〈北海道SF〉をめぐる思弁の旅』寿郎社、770-771.
- 同和行政史編纂委員会（2002）『同和行政史』総務省
- 十津川光子（1958=1963）『コタンの春』朱雀社
- 鳥羽耕史（2022）「劇映画におけるアイヌ表象：内田吐夢『森と湖のまつり』（一九五八年）と成瀬巳喜男『コタンの口笛』（一九五九年）を中心に」『思想』2022・12、109-131.
- 内藤千珠子（2015）『愛国的無関心：「見えない他者」と物語の暴力』新曜社
- 中井理香（2001）「ヒストリオグラフィーの形成：イングランド18世紀後半における歴史と文学」筑波大学大学院人文社会科学部研究科、博士論文
- 中北浩爾（2022）『日本共産党：「革命」を夢見た100年』中公新書
- 中村平（2022）「記号化される台湾先住民：日本殖民主義の認識論と透明な殖民者日本人」石原真衣（編）『記号化される先住民／女性／子ども』青土社、49-79.
- 西館仁追悼集刊行委員会（1994）『雪は熱し：真紅の旗 西館仁追悼集』西館仁追悼集刊行委員会・西館コウ
- 日本共産党中央委員会（1984）「わが地方の日本共産党史（Ⅰ）：日本共産党の六十年・都道府県版 北海道」『前衛』1984・7、98-118.
- 日本共産党道委員会アイヌ人権チーム（2021）『アイヌ民族の先住権を考える』日本共産党北海道委員会
- バタチャーリヤ、ガルギ（2023）『レイシヤル・キャピタリズムを再考する：再生産と生存に関する諸問題』（稲垣健志訳、小笠原博毅緒言）、人文書院
- 鳩沢佐美夫（1960）「嫉妬」、「暗い診断」『日高文学』4号、34-36、『鳩沢佐美夫の仕事 第二巻』藤田印刷
- エクセレントブックスに採録
- （2023）『鳩沢佐美夫の仕事 第二巻』藤田印刷エクセレントブックス
- 原田シゲ・原田克（1983）『ともに生きて：原田了介の生涯』北海道機関紙印刷所出版企画室
- 原田了介（1949）「地主から山林税をとれ」『新しい世界』23号、17-19.
- （1975）「アイヌの歴史と百人浜」『文化評論』1975・6、44-55.
- 原田康子（1956）『挽歌』（東都書房）
- （1959）「阿寒・釧路を訪れる若い女性への手紙」『旅』33巻7号、32-35.
- 東村岳史（2006）『戦後期アイヌ民族-和人関係史序説：1940年代後半から1960年代後半まで』三元社
- （2021）『近現代北海道とアイヌ民族-和人関係の諸相』三元社
- 福澤稔（ひだかたかし）（1970）「アイヌ病院記」『北方群』1号、21-25.
- （1972）「アイヌ病院記」『北方群』2号、27-30.
- （1990）『あいぬ病院記 炎となりて』北方群

- フーコー、ミシェル（2008）『ミシェル・フーコー講義集成〈8〉生政治の誕生： コレージュ・ド・フランス講義1978-79』（慎改康之訳）、筑摩書房
- ほっかい新報社史料刊行委員会（1984）『北海道 進歩と革新の運動史年表』ほっかい新報社史料刊行委員会
- 北海道（1957）『北海道農地改革史 下巻』北海道
- 北海道勤医協歴史編さん委員会（1985）『このあゆみ星につなげ：北海道勤医協の歴史』財団法人北海道勤労者医療協会
- 北海道新聞社学芸部編著（1967）『物語・北海道文学盛衰史』なにわ書房
- 北海道文学館編（1985）『北海道文学大事典』北海道新聞社
- 北海道文学者懇話編著（1956）『北海道文学代表作選集』川崎書店
- 北海道民主医療機関連合会（2006＝2008）「根は日高の土深く：浦河診療所と熱血獣医・原田了介氏」『北海道民医連新聞』2006年7月20日号、『北海道民医連の原風景』、北海道民主医療機関連合会、8-9.
- 向井豊昭（1966）「アイヌの子どもたち：その教育の過去と現実」『部落』18巻12号、46-53.
- （1967）「チカパシ祭り」伴仄生名義、『手』7号。「幻戯書房note」<https://note.com/genkishobou/n/n65795db54da2> [2024年9月アクセス] に採録
- （1970）「キャンペーン」『札幌文学』42号、20-40.
- （1972）「脱殻（カイセイエ）」『手』11号、13-54、『骨踊り：向井豊昭小説選』幻戯書房に採録
- （2014）『向井豊昭傑作集：飛ぶくしゃみ』未来社
- （2019）『骨踊り：向井豊昭小説選』幻戯書房
- 村上由（1965）『北海道労働運動ものがたり：私の歩んだ40年』日本共産党北海道委員会教育宣伝部
- 森竹竹市（1926）「解平運動」『北海タイムス』1926年12月2日号
- 和田謹吾（1965）『風土のなかの文学』北書房
- 山城むつみ（2018）「カイセイエ：向井豊昭と鳩沢佐美夫」『すばる』2018・3、58-94.
- 八森虎太郎（1957）『コタン遠近』日本未来派
- 結城庄司（1980）『アイヌ宣言』三一書房

The Struggles of Ainu Literature and Indigenous Land Ownership: From the Point of Views of Class Organizing of Toyoaki MUKAI, Seiji ISHII, Ryosuke HARADA, and Minoru FUKUZAWA (Takashi HIDAKA) to the Decolonization

Akira OKAWADA*

ABSTRACT

By adopting a historical perspective on the relationship between "Ainu" and Wajin, this paper aims to highlight blind spots in the history of literature and political movements. In doing so, the focus will be on the state of solidarity in the Ainu struggle for "former native" land ownership. During the tourism boom of the late 1950s, Ainu were deprived of their own narrative, and their movement was in a state of stagnation. Tadashi KAIZAWA and other Ainu sought a breakthrough by struggling together with the discriminated Buraku people. Their supporter, Seiji ISHII, was a member of the Japanese Communist Party and had fought with his comrade Ryosuke HARADA and others in the movement to return the aboriginal land ownership of Toyomi Kotan. Minoru FUKUZAWA, whose pseudonym was Takashi HIDAKA, and Toyoaki MUKAI wrote their novels about the complicated situation surrounding the Communist Party, Ainu, and the discriminatory medical or education system for Ainu. Although the class organizing, they aimed for was not immune to paternalism, it was nevertheless meaningful for its concrete results, such as the establishment of the hospital and the development of infrastructure, as well as for its critical potential in preventing the institutional fixation of racial capitalism.

Keywords: Ainu Literature, Hokkaido Literature, Indigenous Land Ownership, Ainu Hospital, Japanese Communist Party

* Literary Critic, Tokai University School of Cultural and Social Studies